

平成 20 年度卒業論文（奈良産業大学情報学部）

早期教育の功罪

桶田 翔一

1. 問題提起

現在、小学校入学前の子どもに習い事をさせている家庭が増えてきている。早期教育が、一家庭あたりの子供の人数が減少するのに反比例して、保護者の教育に関する関心度は高まる一方だ。今の子どもたちは教育に対して少しずつ受け身になっている。言われたことしかできなくなり、自ら好奇心をもって感情を上手に働かせながら何かに取り組むことが少なくなっている。幼児期の早期教育は自然の中で自然に学ぶ機会を奪っている。

なぜ、そのような現状が目立ってきたのだろうか。早期教育とはいったい何を意味するのか。また、子どもたちはどのような習い事をし、何歳から始めているのか。子どもにとって本当に大切な教育とはどのようなものなのだろうか。早期教育のメリット・デメリットをまとめ、早期教育よりも、日常生活を通じた体験の積み重ねが重要であることを論ずる。

2. 早期教育の現状

本章ではどのくらいの子供が習い事をしているのか、何を習っているのかについて調べてみることにする。

2-1. 早期教育の定義

早期教育は、特定の能力や技能の習得を意図して、乳幼児期に施す教育のことをさす。早期教育に対して人々がもつイメージは多様であるが、フラッシュカードや教材を用いて文字の読み・書きの練習をさせるのが早期教育であるとすると、昔から親が子どもの発達を、目的などを持たずに行ってきた絵本の読み聞かせなどの育児上の行為も乳幼児に字を触れさせるという行為は、早期教育と言えるであろうか。保護者が教育目的を意識しなくとも、文字や言葉に親しませるという意味では早期教育に含まれることになるだろう。早期教育には前者の意図的な教育行為と、後者の自然的な教育行為が存在することになる。

汐見（1996）によると、早期教育を次のように定義した。

- ① 特定の能力や技能の習得を意図している。
- ② 出来るだけ早い時期から開始するという志向性を持つ。
- ③ 働きかけに対する子どもの期待される反応を強く期待して行われる。
- ④ 乳幼児への計画的働きかけである。

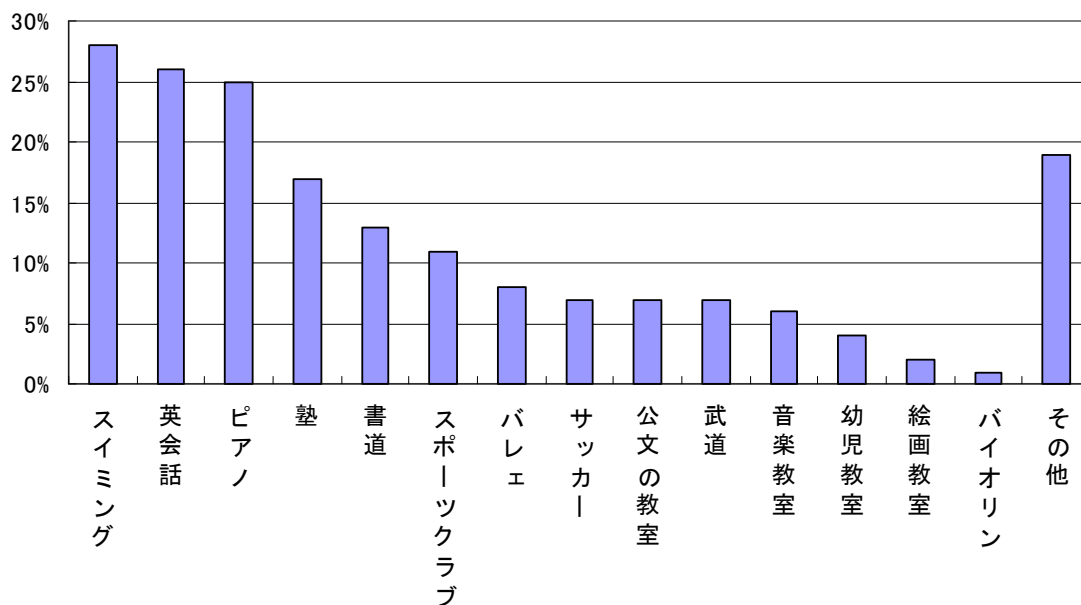
まとめると、能力の育成や技能の習得といった教育目的を明確にもち（条件①）、事前に計画された教育方法等にしがたって（条件④）、乳幼児に働きかけを行い（条件②④）、子供の積極的な行動や参加を促す（条件③）行為のことを「早期教育」と定義したことになる。この場合、日常生活の中での絵本の読み聞かせのような「自然的な教育行為」は計画的な働きかけでないことから、早期教育ではないことになる。汐見（1996）の「早期教育」の定義は、狭い意味での早期教育といえる。本稿においても、以後、「早期教育」は、汐見（1996）が定義した狭義の早期教育を指し示すものとする。

2-2. 早期教育の内容

図1は、子どもたちがどのような習い事をしているかについてまとめた結果である（伊藤・島原、2000）。スイミングを習っている子ども全体の27%でもっとも多い。ピアノや英語などの文科系の習い事と、スイミングや体操教室などのスポーツ系の習い事に比べると、前者が60%、後者が40%となり、ほぼ均衡している。情操面の教育と運動面の教育がともに重視されていることを示している。

スポーツ系の習い事が盛んであることは、遊びを通して運動機能の発達を促すことができない現代の子どもたちの生活の実態を映し出す。現在、多くの住宅街には野原や空き地が乏しく、交通量の増大によって道路も危険とされ、子どもの遊び場が少なくなってきた。また、少子化の進行によって、同年代の遊び仲間も見つけにくくなっている。そうした社会環境の変化が、スポーツ系の習い事を促す要因になっている。

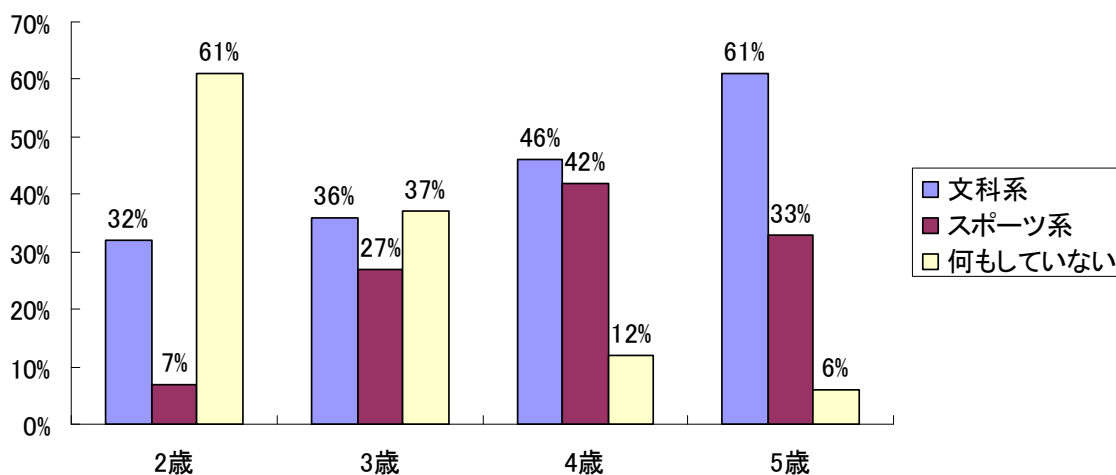
図1 子どもが行なっている習い事の種類



2-3. 早期教育の開始時期

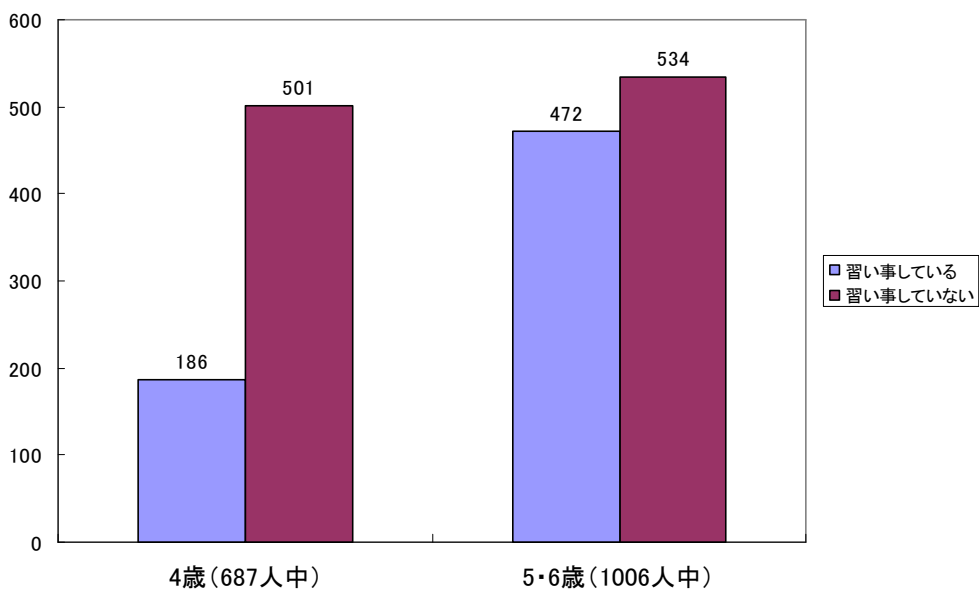
図2は、習い事の内容と子供の年齢の関係を示している（桶田、2000）。4歳の段階でスポーツ系の習い事が40%を超え始め、5歳で習字などの文科系の習い事が60%を超えている。スポーツ系や文科系の習い事の開始年齢は、いずれも4歳頃がピークとなる。

図2 習い事の内容と子どもの年齢の関係



日本子ども資料年鑑（2002）に基づいて、習い事の開始時期を見てみると、4歳児では687人中186人で27.2%が習い事しており、5, 6歳児では1006人中472人で46.9%が習い事をしていると答えた（図3）。5, 6歳の段階で、習い事を始める子どもが増加する傾向にある。5歳は小学校入学直前の時期であることから、習い事を通して子どもの能力を高めておくことで、就学後に子どもが苦労しないようにとの保護者の親心がこの増加傾向に反映されていると考えられる。

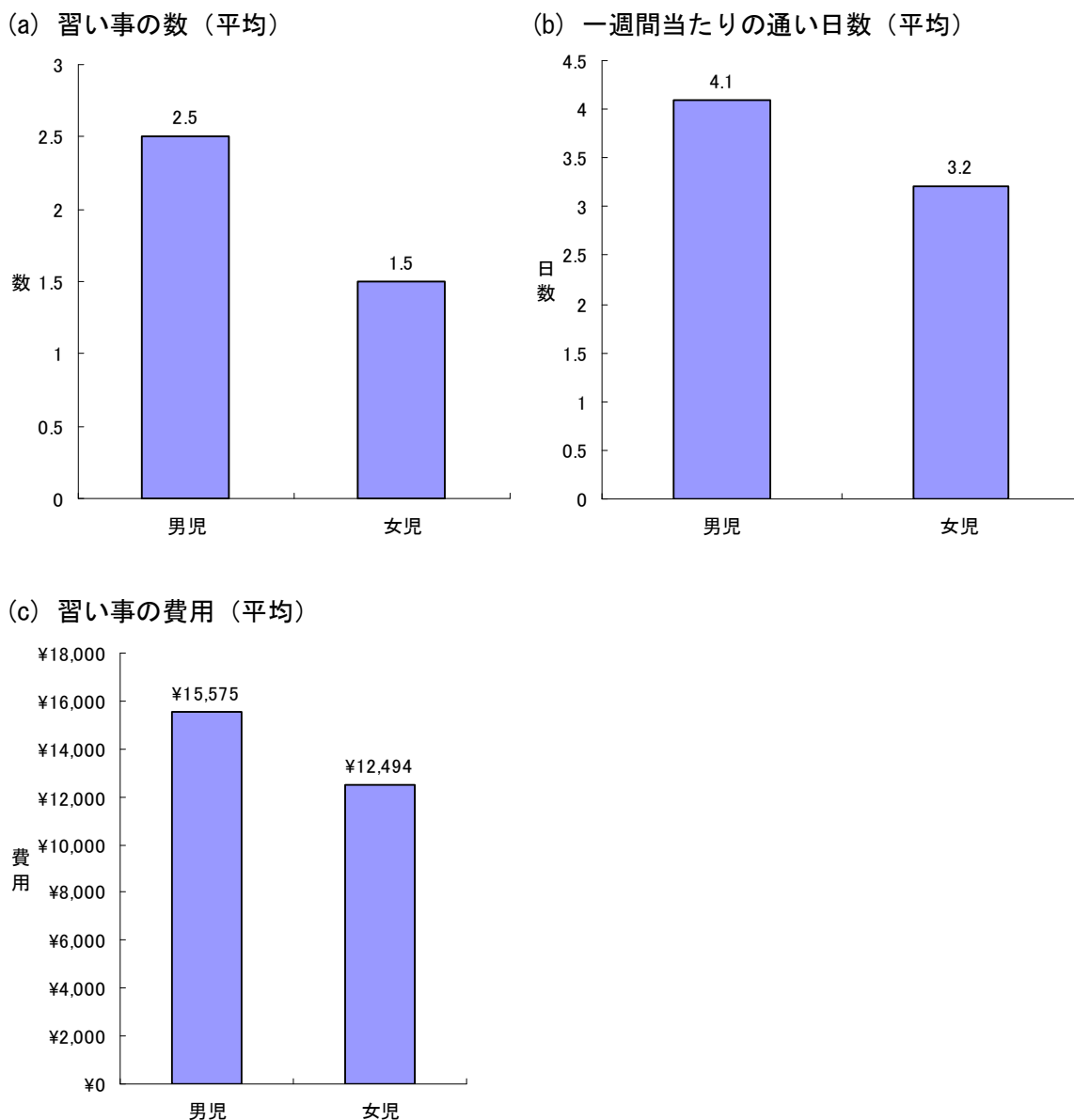
図3 習い事を行なっている子どもの人数（年齢別）



2-4. 男児と女児による違い

男女別では、伊藤・島原（2000）で習い事の数の平均、週あたり習い事に通う回数や費用について男女間に違いが見られ、それぞれ男児の方が数値が高い結果であった。その理由は、男児はスポーツ系や学習塾、幼児教室が多く、運動能力から知性まで大きな期待を抱いている保護者の姿がうかがえる。一方、女児ではピアノが多かった。女児には従来のおけいこごとという言葉で表現された女子の情操教育の一環としての位置づけとなる情操面に中心がおかれている。このように親の意識の違いが見られる。

図4 男児・女児の習い事への取り組み状況の違い

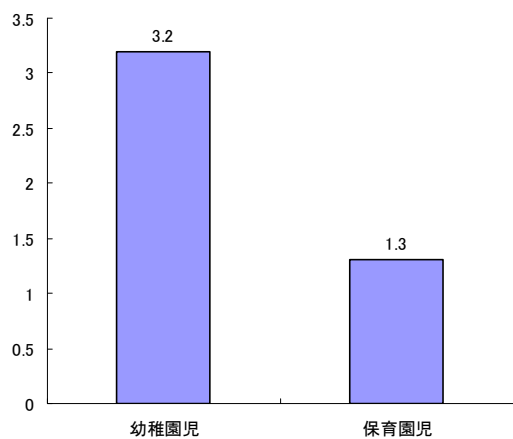


2-5. 幼稚園児と保育園児による違い

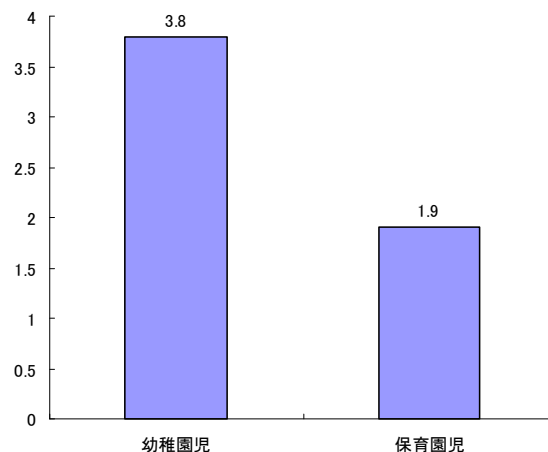
伊藤・島原（2000）で、幼稚園と保育園別の調査では、習い事をしている割合、習い事の数の割合、習い事の数の平均、週当たり習い事に通う回数と費用について、幼稚園児と保育園児に分けて調べ、いずれの数値も幼稚園児の方が高かったことを報告している(図 5)。幼稚園児では 182 人中 113 人(62%)が習い事をしており、保育園児では 98 人中 31 人(32%)が習い事をしている。保育園は拘束時間が長いことから、幼稚園児の方が習い事をしている割合が高いことは当然の結果であると言える。保育園児の場合、土曜日や日曜日を利用して習い事ができるとは言え、保護者と一緒に過ごす時間が少ない保育園児と仕事で疲れている保護者が、その少ない時間に習い事を当てている実態は、習い事が子どもの生活に浸透していることを表している。

図 5 幼稚園児・保育園児の習い事への取り組み状況の違い

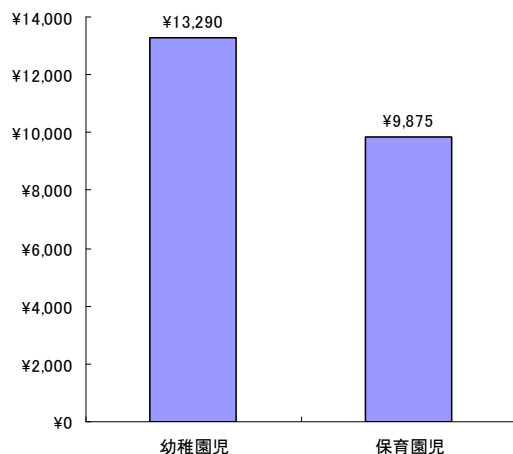
(a) 習い事の数（平均）



(b) 一週間当たりの通い日数（平均）



(c) 習い事の費用（平均）



2-6. 共働き家庭と専業主婦家庭による違い

専業主婦がいる家庭では、子どもを学習塾や習い事に通わせる傾向が強い(桶田,2003)。専業主婦がいる家庭の場合、5歳児の68%が学習塾や習い事に通っており、そのうち、約7割が複数の習い事を利用している。専業主婦は子どもと接する時間が長く、常時、育児に関心を向けていることが、習い事に対して積極的である理由かもしれない。また、保護者間の横並びの意識が習い事を広める結果となっている可能性もある。幼稚園の送り迎えの際に母親同士が交わす会話の中で、他所の家の子どもが通っている習い事が取り上げられると、自分の子どもも一緒に習わせようとなったり、子ども自身が友達と一緒に習いたいということになったりする場合があるだろう。

共働きの保護者は育児に取り組む時間が少ないため、子どもと一緒にいる時間を大切にしようとする意識が働き、専業主婦がいる家庭と比べて、習い事に通わせる割合が低くなっていると考えられる。

3. 早期教育に対する保護者の考え

本章では、子どもに習い事をさせる保護者の意図や思いについてまとめる。

3-1. 習い事をさせる理由とさせない理由

図6は、習い事をさせる理由に関して、保護者280人を対象に伊藤・島原(2000)が調査した結果である。保護者280人中80人(29%)が、習い事をさせる理由として「子どもが希望するから」を挙げている。習い事としてはピアノやスイミングが多く、保護者の押し付けではなく、子どもが自発的に好んで習い事に取り組んでいることがわかる。次いで、「体を鍛えるため」「何か子どもの能力を引き出せると思うから」「小学校へ行って苦勞すると行けないから」という理由が続いている。運動能力や知的能力など、将来必要となる能力を伸ばすために習い事をさせているという保護者の意識がうかがえる。運動面や情操面での習い事は子どもの希望が優先されているが、知能面での習い事は保護者の期待が反映されていると言える。

図7は、習い事をさせない理由に関して、保護者300人を対象に伊藤・島原(2000)が調査した結果である。習い事をさせない理由として、「まだ小さいのに習い事はかわいそう」など、適時性に関する判断が最も多かった。幼児期は遊びが大切であり、自由な時間な時間のなかで遊ばせたいなど、遊びの時間を優先的に考えたり、習い事に対して子どもが興味をもたないなど、子どもの意志を尊重したりする記述もみられる。また、保育園にかよふ子どもの保護者の多くは、時間的な余裕がないことや、送り迎えができないことなど、物理的に不可能であることを理由に挙げている。

図6 子どもに習い事をさせる理由（保護者 280 人に対する調査）

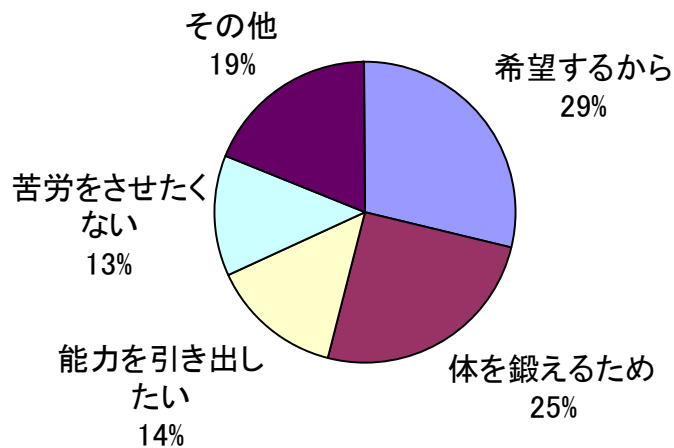
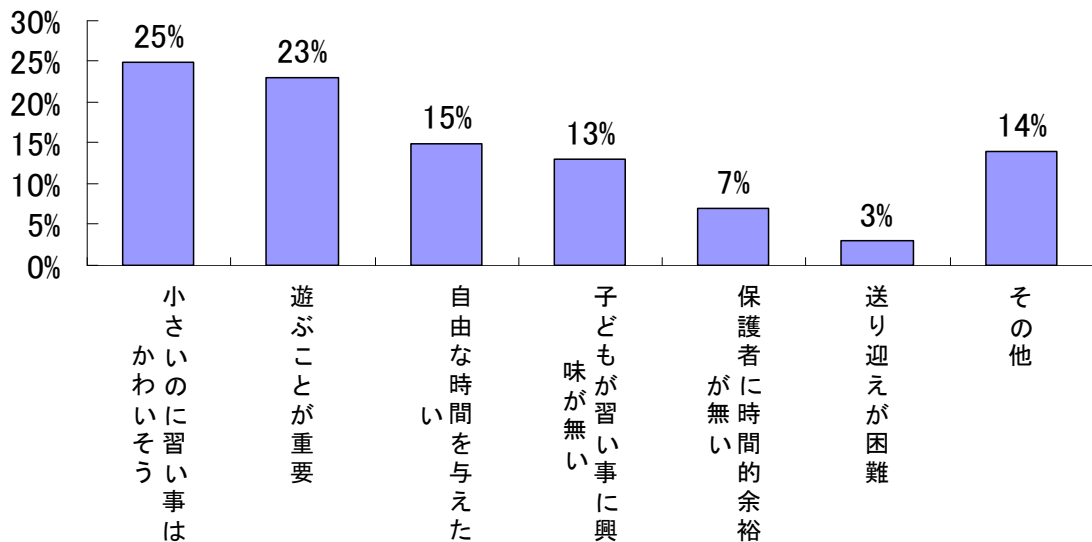


図7 子どもに習い事をさせない理由（保護者 300 人に対する調査）



3-2. 保護者の早期教育に対する考え

幼児期の早期教育に興味を持つ母親は 65%ほどいる(デイリーリサーチ、2000)。また、「日本子ども資料年鑑」(2002)によると、2歳未満の幼児に対して、5歳近くの保護者が習い事に通わせたいと思っている。その習い事の種類としては、スイミングが最も多く(49%)、次いで音楽(33%)、英会話(19%)を挙げている。しかし、「保護者の早期教育に関する調査」(2004)は、早い時期からの勉強は子どもの成長の妨げとなるとみなす保護者が 4 割)以上、

幼児期の遊びが大切であると考えている保護者が9割居ることを示している。にもかかわらず、早期教育に興味を持つ保護者が5割前後いることから、運動や芸術などの能力を伸ばしたり、文字教育を施したりすることは、早ければ早いほどよいと考えていることがわかる。自由に伸び伸びと育てたいという建前と、自分の子どもには早く成長して欲しいという本音が見え隠れしている。

4. 早期教育のメリットとデメリット

本章では、子どもに早期教育を受けさせること、または、受けさせないことのメリットとデメリットを、保護者の視点を通して見ていく。

4-1. 早期教育を受けさせるメリットとデメリット

図8は、習い事のメリットに関して、伊東・島原(2000)が調査した結果である。習い事をして良かった点として、保護者144人中64人(44%)が、「できなかったことができるようになった」「知識を身に付けられた」など、能力面の向上を挙げている。次いで、「人前でも恥ずかしくならなくなった」「自分に自信が持てるようになった」「明るく活発になった」など、社交性が養われ、積極的な性格になったことを、46人の保護者(32%)が指摘している。能力の向上が自信につながり、ひとつのことを継続した経験や、家庭・幼稚園・保育園とは異なる世界に触れることで子どもが刺激され、子どもの個性や自主性などが養われたことがわかる。こうした子どもの精神の発達を促進することが早期教育のメリットと言える。

図8 習い事のメリット（保護者144人に対する調査）

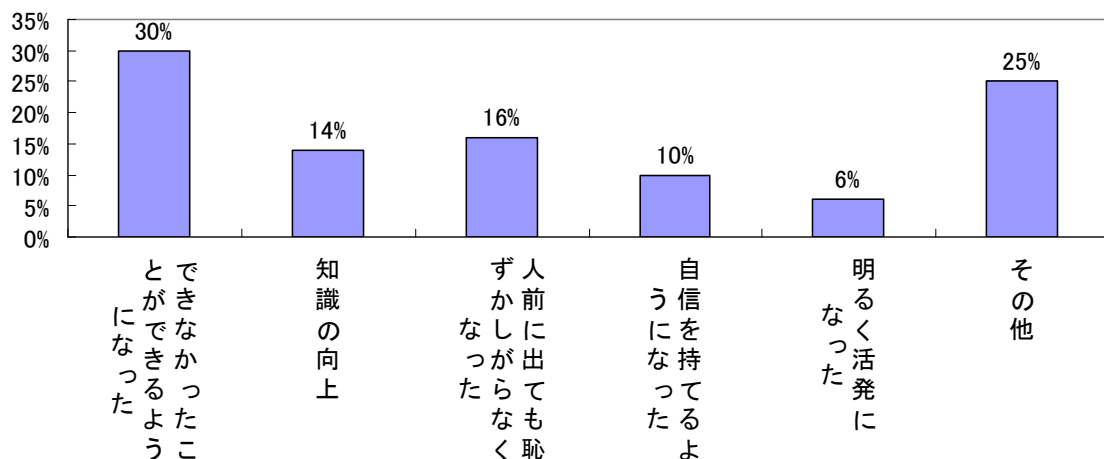
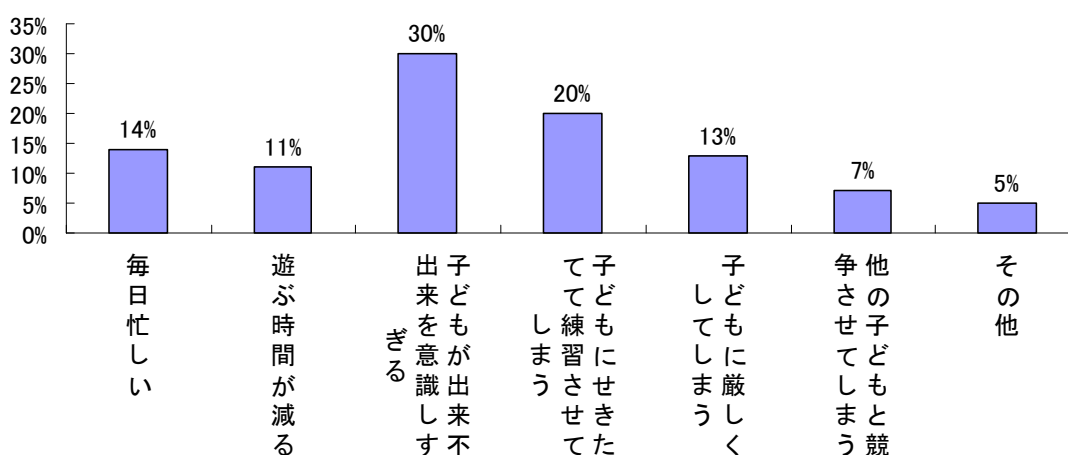


図9は、習い事のデメリットに関して、図8と同じ保護者を対象に、伊藤・島原(2000)が調査した結果である。習い事をさせて悪かった点として、保護者144人中36人(25%)が、「毎日忙しい」「遊ぶ時間が減る」など、時間的束縛を挙げている。次いで、「子どもが自分の出来不出来を意識しすぎる」ことや、保護者が「せきたてて練習させてしまう」「必要以上にしかりつけたりするときがある」など、子供に精神的な負担をかけさせ、親子関係に悪い影響を与えていることを指摘している。他の子どもとの競争意識が、悪い意味で、子どもと保護者の両方に作用していることがうかがえる。

図9 習い事のデメリット（保護者144人に対する調査）



4-2. 早期教育を受けさせないメリットとデメリット

図10は、習い事をさせないことのメリットに関して、保護者136人を対象に、伊藤・島原(2000)が調査した結果である。習い事をさせないでよかった点として、「遊ぶことで体が丈夫になった」という身体的な発達や、「自分のしたいことを自分で見つけて遊べる」など、時間に束縛されずに主体的に行動できるようになったことを挙げている。保護者は、子どもの遊ぶ時間が重要であることを認識しており、時間的余裕を持って遊びながら社会性を発達させていくことを望んでいる。

図11は、逆に習い事をさせないことのデメリットに関して、図10と同じ保護者を対象に、伊藤・島原(2000)が調査した結果である。習い事をさせないで悪かった点として、「能力面での遅れ」を挙げている保護者が多い。また、家庭の行動範囲で経験できる世界には限界があり、社会性の発達が不十分であることを指摘する保護者もいる。家庭で子どもと向き合う時間が長くなることで、親子関係が緊密になりすぎ、子どもの依存心が強くなるなどの問題点もある。

図 10 習い事をさせさせないメリット（保護者 136 人に対する調査）

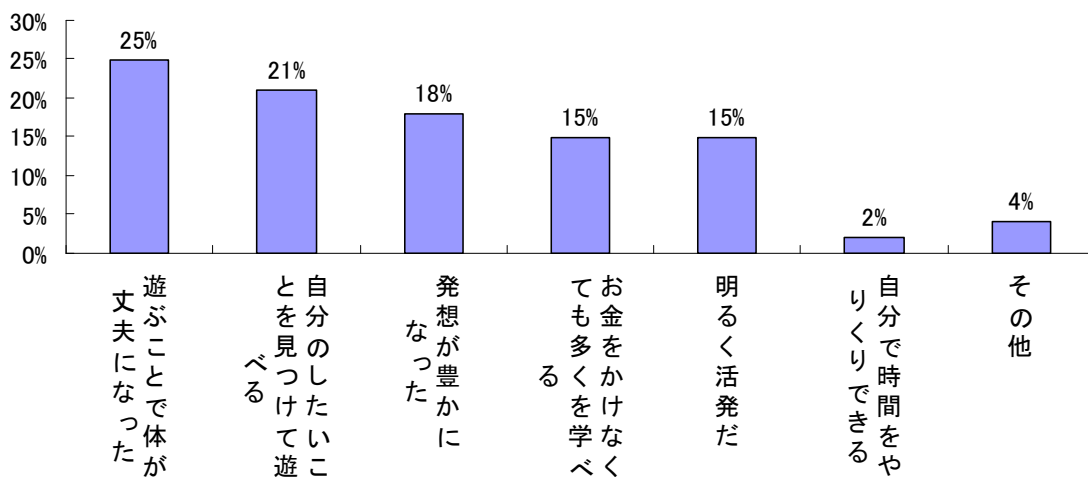
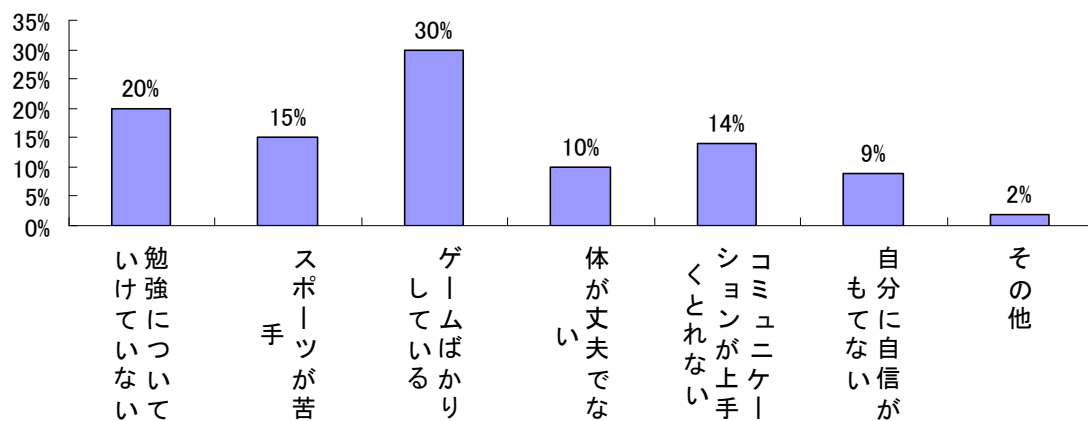


図 11 習い事をさせさせないデメリット（保護者 136 人に対する調査）



4-3. 早期教育は必要か？

子どもが始めに出会う他人は親である。その親に影響を受け、親の真似をしながら、子どもは成長していく。幼年期に不適切な環境の中で偏った経験をすれば、成長後に何らかの悪影響が出てしまうだろう。早期教育によって、理屈で物事を考えることが得意になるかもしれないが、その反面、感情的に物事を捉える感情が養われない危険性がある。自然な遊びの中で同年期の子どもや大人と触れ合いながら、段階的に様々な経験をつんでいく生活を送っていれば、知性と感情のつりあいを自ら身に付けていくことができる。しかし、習い事のような区画的な環境下では、その釣り合いが崩れてしまうのではないだろうか。

山口（2005）は、早期教育のデメリットとして、受動的な学習によって、子どもの自発性や創造性の発達が抑制されることを挙げている。しかし、同時に早期教育によって、子どもの自発性や創造性が発達したケースもあることを指摘している。保護者は、早期教育のメリットとして、知識や精神面の発達につながることを挙げている一方で、デメリットとして、幼い頃に必要な遊ぶ時間を減らしてしまっていることを指摘している。保護者も、教育関係の研究者も、早期教育を受けさせるべきか葛藤を抱いているようにみえる。子どもが習い事を遊びと感じられるような教室を増やしていくことが、保護者の葛藤を温和させるひとつの解決策になるのではないだろうか。

5. まとめ

子どもの人格の基礎ができる幼児期は大切だが、今まで一般にこればかりが強調される雰囲気があった。子どもの心の成長には、母親の側の程よい失敗や修正も必要なことや、幼児期が人格を決定することなく、大切な成長の過程はその後も展開していくことがもっと伝えられるべきであると思う。

習い事はあくまで知能や能力の活性化であって、何を覚えたとか、どのくらい性格に計算できたかということはどうでもよく、子どもなりに何かに取り組んだという体験をたくさんすることが主要である。子どもは自然な探索活動や、遊びの中で頭を必死に使っている。例えばしりとり遊びや言葉遊びが挙げられる。この遊びは、そのとき子どもの生活になくしてはならないものというより、言葉をつかっている脳の部位を活性化させている活動である。幼い子どもが虫に興味をもったり、恐竜に興味をもったりしてその名前を全部覚えてしまうのも、生活に必要というよりも頭の体操のようなものである。そうした知的活動を少し意識的に活性化してやるのが早期教育といえるのではないか。

子どもらしい自由な遊びを中心とした生活が常に一番大きくあり、その上にその中で感動したこと、疑問に思ったこと、熱中して考えたことなどの生活がのっかり、その一部がことばや表現とされていくのだ。この関係とそれぞれの大きさが逆転してしまうと生活と発達のバランスが崩れていく。子どもの発達には今述べたような種類のバランスが大事であると思う。

早期教育を善意で進めようとしている人は、こうした潜在的可能性の引き出しということに挑もうとし始めているのだ。そのための教育がはらむ数々のデメリットについては検討済みにはなっていない。

また、さまざまな早期教育のビジネスが広まっているが、さまざまな情報に大人がふりまわされるより、自分の中の共感的感性を信じ、当たり前の家族関係、友人関係、環境との関係をもつことが、子どもがひとりの個人として成長していくうえで重要である。親が大事に思っていること、生きていくうえで欠かせないこと、日常の中で具現化して子どもと一緒にやる、あるいは、子どもの目の前で見せていくことで子どもが学んでいくこ

とが多いため、人と人のかかわり方が重要である。これを親が子どもに伝えられれば、子どもたちは自分に一番あったものを自分で選んでいく。自然のかかわり方は、何気なく送っている日常の暮らしの中の食べることや、身の回りなど生活習慣の中に大事なことが詰まっている。

そして、もうひとつ欠かせないことは、いろいろな人にかかわり、助けてもらうこと。親がそういう人間関係を大切にすれば、子どもも人っていいなという思いを肌で感じることが出来る。習い事で、英語が話せる、ピアノが弾ける、上手に泳げることも必要だが、雑巾がけが上手、ケンカの仲裁が得意、小さい子どもと遊ぶのが好きといった、暮らしの中で役に立って喜ばれたり、認められたりすることによって、「自分はこんなこともできるのだ」という実感がもてる。また、それが将来の自信につながったりするのではないか。

また、大人は子どもがすることに対し、何かのためになるからということを求めがちである。子どもたちは何かのために遊んでいるわけではないし、大人になるために生きているのではない。今を生きているために生きているのだ。大人にできるのは、先のことを考えて植えつけることではなく土壌を作ってあげること。習い事は親が無理強いし、強制するものでは意味がない。それよりも、友達との時間を保障してあげることが大切である。子ども自身のスピードでやりたいことを見つけだしていければそれで良いのだ。

そして、今の子どもには昔の人より経験が少なく、自己のコントロールができない。社会は急速に日々変化していくので仕方がないことだが、親や大人がしっかりと意思をもち、子どもに外発的な動機付けをすることで、子ども自ら内発的行動ができるようにしてやる。子どもの自発的な行動を基本的に受け入れることによって、子どもの自己実現の拡大を強めることが大切である。子どもは親のもとで失敗をしながらも成長し、自我と自我のぶつかりあいを経験して人格を形成していくのだ。

形あるもの、答えあるものを教わるという学び方にならないように、遊びの中から自然な形で身につけるのが望ましい。子どもにとって何が良くて、何が悪いのかは判断つけにくいのが、子どもの表情や行動を見て、言葉に耳を傾け、精一杯に想像力を働かせて親は付き合っていくべきである。

引用文献

- 新井 邦二郎 (1997) : 図でわかる発達心理学, 福村出版.
- 斉藤 まりこ (2005) : 第3回幼児の生活アンケート, ベネッセ教育, pp8~11.
- 伊藤 葉子・島原 菜穂子 (2000) : 習い事に対する親の意識, 千葉大学教育学部研究紀要・教育科学編, 48, pp111~122.
- 汐見 稔幸 (1993) : このままでいいのか超早期教育, 大月書店, pp104~108.
- 高良 聖 (1996) : 「現代早期教育事情」汐見稔幸『警告! 早期教育が危ない』, 日本評論会, pp24~27.
- 桶田 大二郎 (2003) : 第2回子育て生活基本調査「子どもへの期待と習い事」, ベネッセ教育研究所, pp58~71.
- 保坂 展人 (1996) : ちょっと待って! 早期教育, 学陽書房.
- 間瀬 尚美・藤村 憲子・川上 道子・山岡 テイ (1999) : 子どもの習い事の実態と母親たちの意識, 日本保育学会第52回大会研究論文集, pp420~421.
- 毛利 子来・山田 真 (2005) : ちいさい、おおきい、よわい、つよい 49 早期教育・お教室通い, ジャパンマシニスト社, pp6~36.
- 無藤 隆 (2000) : 第2回幼児の生活アンケート報告, pp36~39.
- 日本子ども資料年鑑 (2002) : KTC 中央出版, pp12~19, pp308~309.
- 生活情報センター編集部 (2004) : 日本人の子育て・教育を読み解くデータ総覧, pp44~47.

教育とは何か — 現役小学校教師の見解 —

最後に、現役教師の見解を紹介する。

教育熱心な親が増えてきているがその反面、近年親を殺害するなどの凶悪な少年犯罪が増えてきている。それに対して、ニュースを見ている人は「どのような教育のもとに育ったのか」と犯罪者である少年や、家族に疑問を抱く人が多い。しかし、学校の指導については疑問を抱く人はほとんどいない。それは間違っている。家族も学校も親身に子供と向き合わないと「教育」は成り立たない。私は、学校が生徒ととるコミュニケーションを「教」と考え、家族が子供ととるコミュニケーションを「育」と考える。

教師が問題を理解できていない生徒が居ても放置するようでは、その生徒は教師と「教」というコミュニケーションを取っていないことになる。また、家族が子供に対してまともに顔を合わさず会話もしないバラバラな家庭であれば、その子供は「育」というコミュニケーションを取っていないことになる。さらに現在は、家族と学校がお互いのコミュニケーションを取れていない。これではその少年の周りに「教育」というコミュニケーションが生まれることはなくなる。

しかし、子供の中にも色々な個性があり、人見知りをしない子供はわからないことがあるれば自ら教師に尋ねることができ、バラバラな家庭でも自らが歩み寄ることで家庭を修復できる。バラバラな家庭を修復できるのは子供である。それは、子供は正直であり真っ直ぐな心を持っているため大人よりも先入観にとらわれないからである。しかし、人見知りや内気な子供ならばどうであろうか。問題がわからなければわからないまま、家庭も教師も子供を気にかけなければ誰がその子供を支えてあげられるのか。よって、どんな性格の子供に対しても平等にコミュニケーションをとることが必ず必要だ。教育にもコミュニケーションにも互いのかかわりが大切だ。

「コミュニケーションと教育」とは、家庭と学校がお互いに協力しながら子供を支えていくことである。家庭も学校も、子供とコミュニケーションを常に取り、コミュニケーションという言葉が生まれるものだと考える。当然そのうえで、家族と学校もコミュニケーションを取り、上手く協調していくことでより素晴らしい「教育」が生まれる。教育だけではなく、人と人がつながり合う人生には必ずコミュニケーションは必要である。私は、仕事でもプライベートでも人とのコミュニケーションを最重要として考え、お互いにより信頼関係を築いていく。

「教育」というものは複雑だが、子供にとっては大人になるためには必ず必要なものだ。同じく「コミュニケーション」も大切で、子供の時からどれだけ多くの人とコミュニケーションをとってきて、どれだけ物を得てきたのかが経験になる。そして大人になり、社会人になるときに、今まで経験してきたことを生かして行き、自分に子供ができたならまたコミュニケーションを取りながらしっかりと育てて行く。簡単そうで難しいその繰り返しがこの世の中にも一番必要なものだ。